
little honey

蒼真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

little honey

【Zコード】

Z3910Z

【作者名】

蒼真

【あらすじ】

「ぐぐく普通の高校生である俺、高村佑樹。

勉強もスポーツも容姿も平均程度。特技らしい特技もない。
それゆえ、これまでモテた経験はない。

しかし、そんな俺がある日突然、情熱的な愛の告白を受けたのだ。
本来なら嬉しくてたまらないはずなのに。

俺は素直に喜ぶわけにはいかなかつた。

なぜなら、その告白をしてきた少女は・・・。

高校生の少年を主人公としたラブコメディです。
他サイト「アツトノベルス」にも掲載しています。

第1話～突然の告白（前書き）

勉強もスポーツも容姿も平均並みの高校生の少年が、ある一人の少女に

好かれてしまうラブコメティ。

シリアスな部分もありますが、基本は明るい話を目指しています。

第1話～突然の告白

「あなたがすきなの・・・」

つるんだ瞳。情熱的な愛の告白。

その熱を含んだ視線は俺をしっかりとからめこむように、身動きができなかつた。

それを知つてか知らずが、その少女は俺に体をぴつたりと寄せている。

俺はこれまで女の子にモテた経験はない。

恥ずかしながら、重ねたきた年齢の数だけ彼女がいなかつた。
彼女いない歴17年。

それほど変な男だとは思つてはいないが、いわゆる『モテる男』ではない。

それはハッキリと自覚している。

この世には生まれつきモテる奴とモテない奴がいる」とぐらりよくわかつている。

そんな『モテない男』である高村佑樹が情熱的な愛の告白をやれていっているのだ。

それまで何度も頭の中で描いていた（妄想していた）理想的なシチュエーション。

夢にまで見たその状態は、狂喜乱舞といつていいぐらいの嬉しさだろう。

本来ならば。

自分とさほど変わらない年齢の少女、または年上のキレイなお姉様であったのなら
その場で踊つてみせてもらいうべういの嬉しだったと思つ。

やう、俺はこの状態を素直に喜ぶわけにはいかなかつたのだ。

なぜなら・・・

愛の告白をしてきた少女は・・・

・・・まだ幼稚園児の女の子なのだから・・・。

第2話～その少女の名は美月

「あ、あのね、ひょっと落ち着いて～、美月ひちゃん・・・」

体をぴったりと寄せ、潤んだ瞳のまま俺を見上げている6歳の少女。その目は恋した女だけと何ら変わらない（のよつな気がする）から驚きだ。

「どうして・・・？」

みずきが佑にいちゃんなこと、『すき』つていっても信じてくれないの・・・？

いや、信じる信じない以前に、この状態はまずいだろ？！
6歳の幼女が高校生の男の体の上に乗っかるようにして、愛の告白をしているのだから。

早く俺の上からじててくれーとストレートな言葉が口から出かかつたが
俺は必死にそれを飲み込んだ。

そのまま言え、美月ちゃんを深く傷つけてしまひだらうか。

「いや、その・・・美月ちゃんのことを信じないわけじゃないんだよ。」

ただ・・・その・・・俺も男だから・・・。

男として、こんな状況を軽々しく受け入れるわけにはいかない
っていうか・・・

え～っと・・・と、とにかく、一旦離れよう？

幼女に對して言い訳めいた釈明をしつつ、俺は倒れかかった体を起こし

美円ちゃんの肩を掴んで、そっと俺の体から引き離した。

あまりに不自然なその状態から少しだけ抜け出せば、やつと落ち着いて呼吸ができる気がする。

しかし、状況が変わったわけではない。

あの真剣な眼差しから考えて、美円ちゃんが嘘をついているとは考えにくい。

いや、いつそ嘘であつてくれたほうがどれだけいいか。

おそれおそれ美円ちゃんの様子を伺えば、つづむにて肩を震わせている。

泣かせてしまつたのか・・・?

しかし真つ当な男なら、幼女からの告白を受け入れるなんて出来ないはずだ。

(一部の男は大喜びなのかもしれないが)

「つづむいた美円ちゃんからやがてすすり泣く声が聞こえ出した。

やつぱり泣いている・・・。

「あ、あのね、美円ちゃん・・・」

告白を受け入れる」とほんできなくとも、幼女を泣かせてしまうのはなんとも氣分が悪い。

なんとかなだめたいが、いつものように頭を撫でてやつてもいいも

のかどうか。

それさえ悩む。

俺は一体、どうしたらいいんだ……。

頭を抱え込むようにして悩んでいると、美月ちゃんが先に言葉を発した。

「佑にいちやん、みづきの思いをわかつてくれないだ……
みづき、まだ小さいけど本気だよ？」

前にテレビで見たもの。

すぐ近く歳の離れた男の人と女の人が結婚していたりするよ？」

いや、それは両方が大人だから許されるのであって。

たしかに芸能界だとかでは、かなり年上の男（熟年）と若い女性が結婚していたりする。

それは嘘ではない。本当のことだ。

しかし、相手が幼女で、しかもその幼女の想い人が高校生だなんて……。

そんな恋愛、あるわけがない。

妄想の世界ではあるのかもしれないが、現実であつてはいけないとだ（と思つ）。

「あのさ……美月ちゃんが俺のことを『好き』って言つてくれるのは嬉しいよ？

でもね、それを簡単に受け入れるわけにはいかないんだよ。

俺にとって美月ちゃんは……家族のような大切な存在だからいい加減に扱いたくないんだよ。

そのとこ、わかってくれる？」

「みづきの」と、大切なの？」

すすり泣いていた美月ちゃんの涙が止まつた。

よしつ…泣き止んだぞ…

「そうだよ、美月ちゃんは『大切な子』だ」

再び泣かせたくなくて、慌てて言葉を続けた。

「うんっ！ みづきにとっても佑にいちゃんは『大切な人』。佑にいちゃんにとってもみづきは『大切な子』。だったら、一人は『両思い』だねっ！」

・・・どうしてそういう解釈になるんだあー！！

「うれしいなっ 佑にいちゃんとみづきは両思い～」

美月ちゃんはまるで歌うかのよつに、『機嫌でつぶやいている。

「じゃあ、またね～。佑にいちゃん。
明日もまた、みづきと遊んでね！」

軽やかなスキップで俺の部屋を出ていく美月ちゃん。
あまりな展開に呆然としている俺を一人残して。

第3話～少女との出会い

現在幼稚園児の美月ちゃんが隣に引っ越してきたのは、およそ4年ほど前のことだった。

当時、俺は中学生。

外資系の証券会社に勤める父親と品の良さそうな母親、そして一人娘。

父親は仕事が忙しいらしく、家を空けがちで、あまり顔を見たことがない。

たまに顔を合わせることあっても、俺の挨拶を軽くスルーしてくれるるので

正直あまりいい印象はない。

母親のほうは、近くに誰も知る者がいない地域に越してきたようでは隣である俺の母を何かと頼るようになり、いつしか年代は違うのにすっかり打ち解けていた。

二人でよく長話をしているので、一人になつた美月ちゃんは自然と俺が面倒を見るようになった。

『俺なりの事情』もあり、小さい女の子には努めて優しく接してやろうと思いつつ一緒に遊んであげた。

一緒に公園に行つたり、お人形さんごっこに付き合つたり、子供向けDVDと一緒に見てやつたり。

それなりに楽しいこともあるが、所詮は幼女のお守り。

時折面倒になることもあったが、小さな美月ちゃんは俺を『佑兄ちゃん』と呼んで

よくなつき、俺の顔を見ると嬉しそうに飛びついてくるので悪い気

はしなかつた。

遊び疲れると床の上で寝てしまつたことがあり（幼児つてのは突然寝てしまつたりしき）

そのままにしておくわけにはいかないので、俺のベットに運んで寝させてしまつたりもした。

そんなわけで、寒の妹でもないのに、すっかり美月ちゃんの『良いお兄ちゃん』

となつた俺だつた。

そんなんある田のじと。俺は自室で学校の宿題のレポートをまとめていた。

美月ちゃんは遊び疲れてお昼寝中だ。

ところが、俺のベットですやすや寝ていた美月ちゃんがぐずぐずと泣き出した。

悪い夢でも見ていらしい。

以前にも何度もこうこうじがあり、初めてのときはびくしていいのかわからなくて

慌てて母のところへ飛んでこつて報告し、どうすればいいのか相談した。

母曰く、幼児といつのは眠りから覚める前後で見る夢に驚いてつなされたり

いきなり田覚めたことだ、ちょっとしたパニックになつたりするらしい。

だから、そんなときはさつと抱きしめるよつて体を支え、背中をもすつてやつたりして

スキンシップをとりながら、大丈夫だよ、と声をかけてやれば自然と落ち着く、とのこと。

母に言われた通りの方法で対応すると、美月ちゃんは落ち着くことがわかつたので

俺はその日も同じように対応した。

そつと抱きしめて、背中をさすり

「大丈夫だよ。怖いものなんて何もないから。俺がついてるよ」「
これで落ち着いたのだ。それまでは。
と声をかけた。

しかし、その日は美月ちゃんはそれだけでは落ち着かず、俺に勢いよく抱きついてきたのだ。

予想していなかつた美月ちゃんの行動に俺は体のバランスを失い、ベットに倒れたような格好となつた。

そこに冒頭の『愛の告白』があつたのだ。

正直、青天の霹靂と言つてもいいぐらいの出来事だったが落ち着いて考えてみれば、あれは美月ちゃんが寝惚けていたのかもしれない。

うん、きっとそうだ。

昼寝から覚めた直後だつたのだから、悪い夢でも見てうなされ、寝惚けてしまつたのだ。

そうだ、そうに違ひない・・・

明日からどうして美用ちゃんに接していくのか悩んでいたが
『寝惚けていた』という結論に達してから、俺の気持ちはすっかり
落ち着いていた。

明日になれば美用ちゃんはきっと今日のことは覚えてこないだろ？
だって寝惚けていたのだから。

そう思いながら、残った宿題を片付けて、晴れやかな気持ちでベ
ッドに入り、眠った。

明日になれば全て解決している、とそう信じて。

しかし、その解釈はとても甘いものであつたことを
翌日になつて俺は思い知られるのである。

第4話～おわかの展開

「…………？」

翌日、俺が学校から帰宅し、小腹が減ったので何かないかと冷蔵庫を

あさくつてこたときのこと。

母さんが事も無げに言つたのである。

「お帰り、佑樹。

もうやがて、アンタとお隣の美冴ちゃん、『婚約』するところにな

つたから」

「あ、やつ『婚約』ね……。

・・・つて、ちよつと待て！

『婚約』つて何だよつ！？」

俺は驚嘆して、冷蔵庫から出したばかりのパーリ出を机の上に落としてしまい

驚くやら痛いやうでわけがわからない。

「何もそんなに驚く」とないじゃない。

『婚約』と言つても、ちよつとした形式だけよ。

美冴ちゃんを喜ばせてあげたいの。

美冴ちゃん、アンタの『じぶ』王子様か何かに思つてるみたいだし。

し。

私から見ると、じみーな高校生なんだけどねえ。

まあ、あのぐりーこの女の子って年上の男の子に妙に憧れたりす

るしね。

そんなわけで、いいわね」

何がいいとこか。

「美月ちゃんママの琴子さんも大賛成でね。
以前から『アンタのこと褒めて、大層気に入ってくれてたみたい
だし。

何より『美月が喜ぶわ!』って嬉しそうだつたしね」

「ちよ、ちよっと待て……」

「何よ、何か文句でもあるの?」

「大有りだよつ!」

なんだよ、『婚約することになつたから』って。
まるでどこかに旅行に行くみたいな気軽な言い方は。
大体、俺の意志はどうなるんだよつ!」

「なうに、ムキになつてるの?」

だから『ちょっとした形式だけ』って言つてるでしょ。
二人で並んで座つて、簡単な書類みたいなものにサインして、
写真撮るだけよ」

「『形式だけ』つつてもマズイだらつ!」

高校生と幼稚園児なんだぞ!

世間はどう捉えると思うんだよ?

そもそも俺は美月ちゃんのこと、そんなふうに想つたことほ
度もないぞ!」

「でも、アンタ、美月ちゃんに告白されて
『大切な子だよ』って応えたんでしょ？」

途端、昨夜の美月ちゃんに押し倒されたよつた形で告白されたことを思い出した。

幼女とは思えない真剣な眼差しの美月ちゃんを。顔が熱くなつてくるのを感じた。

「み、見てたのかよつー？」

声が裏返つていたが、母はそんなこと気にもしていなによつだ。

「や～ね、覗くわけないでしょ。

美月ちゃんから聞いたのよ。

『みづきと佑にいちやんは両思いなんだよつー』って。

美月ちゃん、とつてもいい顔してたわ。

あの笑顔を何とか続かせてあげたいね、つて琴子さんとも相談して

じやあ、『ウチの息子と婚約でもさせてあげたらどうかしら？』
つて

話になつたのよ。

美月ちゃんね、今、幼稚園に行きたくないらしくて毎日元気がないの。

だから少しでも喜ぶことをさせてあげたいわけ。

アンタも少し協力しなさい、いいわね！」

「いいわけないだるー！」

俺は慌てて母の言葉を制した。

『冗談じやない、高校男児が幼稚園児と婚約なんてことになつたら…

学校の奴らに知られたら死ぬほど笑われるし、女の子たちには口コン扱いされてしまつ。

ただでさえ、モテないの。

「そり・・・お母さんの頼みを聞いてくれないのね・・・」

そう言いつなづ、俺をじつと見つめる母の目から涙がポロリと零れ落ちた。

びうせ、嘘泣きだ。それはわかってる。
だけど・・・

俺は母さんの泣き顔にはとことん弱い。

以前は泣いてばかりいた母がやつと泣かなくなつたのだ。

少しでも泣き始めると昔に逆戻りしてしまいそうで、俺は慌ててしまつ。

母をそれを知つていて、『じじやとこうときて使う』『作戦』なのである。

それはわかつているのだか・・・。

母さんの目からどんどん涙が溢れてくる。

その顔を見ていると、どうにも落ち着かない。

「わ、わかつたよつ！

『おままで』と『の続きか何かだと思つておけばいいんだがつへ。

その代わり、周囲の人間には絶対にバラすなよ

「

途端、母は涙を拭きながらニヤリと笑つた。

「やすがは私の息子。優しい子ね。母さん嬉しいわ。

じゃあ、近ごろ『ひびきのつもつ』をあげるからいつでね

母の作戦にまんまとしてやられてしまった。

何でこうなるんだ・・・。

「ひして俺は何の因果か、

『幼稚園児と婚約する高校生』になってしまったのである。

この先、俺は一体どうなるんだ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3910z/>

little honey

2011年12月16日18時48分発行